

シンポジウム報告

新しい追悼施設は必要か—若き宗教者の発言—

2003年1月11日に国際宗教研究所主催によって、表記の題で国立の新しい追悼施設建設をめぐるシンポジウムを大正大学で開催した。出席者は約100名近くに及び、活発な議論が展開された。靖国神社や戦没者に対する慰霊に関する長年に渡っての議論が今なお衰えないばかりか、新たな状況を迎えた今日、これらの問題に対する関心がますます高まっているということの証左といえよう¹。

〈プログラム〉

報告者

菅 浩二（國學院大學日本文化研究所）

岡田弘隆（弁護士・真言宗豊山派僧侶）

澤田晃成（立正佼成会）

弓谷照彦（創価学会）

寺尾寿芳（和歌山信愛女子短期大学）

コメンテーター

シンポジウムの趣旨は以下の通りである。靖国神社への首相の公式参拝問題が紛糾した経緯をふまえ、2001年に内閣官房長官の下に、「追悼・平和祈念のために記念碑等施設の在り方を考える懇談会」が設置され、審議が開始された。戦死者をめぐる新しい追悼施設が必要かどうかをめぐって、戦没者の公的な追悼・慰霊行事の在り方について、さまざまな意見がたたかわされている。この戦死者をめぐる新しい追悼施設構想について、第二次世界大戦を経験していない若い世代の宗教者はどう考えているのか。靖国神社や千鳥ヶ淵戦没者墓苑との関係をどう考えればよいのか。そして、そもそも戦死者を公的に追悼するしかたについて、どう考えるべきなのか。人々の意見交換の場とするとともに、広く戦死者の公的追悼のあり方について考えを練る機会とすることを目指す。司会は井上順孝氏（國學院大學）が行なった。

シンポジウムの概要は以下の如くである。まず、井上順孝氏が趣旨説明を行ない、昨年12月に官房長官の私的懇談会が新しい追悼施設を作ることを提言したことを説明した。

続いて菅浩二氏（國學院大學日本文化研究所）が、新しい追悼施設は不要とする報告を行なった。その理由は、(1)新しい追悼施設建設は中国・韓国政府の抗議に対する場当たりの対応に過ぎず、国民的合意を背景としたものではない、(2)追悼施設が「無宗教」とされることによって、追悼の場の公共性が担保されるのかという疑念があり、コミュニケーションの必要を感じる、(3)靖国神社が戦没者慰霊において重きをなしてきたのであり、個々の祭

¹ 本誌第36号、広池真一「新たな国立墓苑」構想—「無名戦士の墓」と「怨親平等」をめぐって」を参照。

神は、より大きな普遍性への「通路としての神」の性格をもっている、という三点である。

岡田弘隆氏（弁護士・真言宗豊山派僧侶）は、全く異なった立場から新しい追悼施設建設の反対を表明した。岡田氏によれば、国家による戦没者追悼とは、戦没者・戦争の賛美になるからであり、追悼は純粋に宗教的・私的に行なわれるべきだからである。それは仏教が明治以降の侵略戦争に協力してきたことの反省から来るものであり、再び同じ過ちをくりかえさないためのものである。また、官房長官の下での私的懇談会設置の目的は、将来の戦没者と戦争の賛美のためではないかと述べた。さらに、靖国神社は宗教法人としてこれまで通りとし（厚生労働省との関係は断つべきだが）、千鳥が淵戦没者墓苑は特定できない戦没者の遺骨管理の場所としてこれまで通りにすべきだと述べた。最後に、新たな戦没者を含める国立追悼施設には反対だとする、全日本仏教会のこの件に関する統一の見解を紹介した。

澤田晃成氏（立正佼成会）も、新しい施設は受け入れられないと主張した。まず、靖国神社が軍国主義、国家主義と結びついた非伝統的な宗教施設であるという研究を紹介した。次に、首相の靖国神社公式参拝に反対してきた新日本宗教団体連合会の立場、靖国神社国家護持に反対してきた立正佼成会の歴史を紹介した。さらに、自分自身の見解として、新しい宗教施設が将来の戦争と新しい戦争を想定したものであり、建設には反対すると述べ、むしろ千鳥が淵戦没者墓苑を象徴遺骨の墓苑として再整備すべきことを提言した。

弓谷照彦氏（創価学会）は発表者の中で唯一賛成の立場を表明した。弓谷氏は議論の出発点として首相の靖国神社公式参拝への反対を挙げ、今回の追悼施設検討論議が靖国問題の克服への挑戦として始められたことを評価し、ゆえに公的追悼施設には一定の必要性が認められると論じる。また、国家神道に反対してきた創価学会の立脚点を紹介した。さらに、追悼対象からのA級戦犯除外が言明されるべき、宗教的人格権が尊重されるべき、「政教分離」概念が偏っている、など私的懇談会の報告書の問題点も指摘した。

寺尾寿芳氏（和歌山信愛女子短期大学）は、カトリックの平信徒として意見を表明し、この問題を語るにはまず宗教者そのものの自己反省が前提になること、死者こそが最優先されるべき主体であるとともに客体であり、いかにわれわれが死者のリアリティを再生できるかが課題となるだろうといった考えを「新しい『新しい中世』」という着想から述べた。寺尾氏によれば、氏は基本的に靖国をめぐる問題では批判的な立場に立っているが、新施設もあまりにも問題が多く残され、慎重な態度を守っているという。この問題は理性では統制できない感情や情動の次元に着目することが不可欠であり、そのためにも前近代的な中世というものをよく知らねばならない、と主張した。

報告者の発表を受けて、コメントを**中村生雄氏**（大阪大学）と、**李仁子氏**（東北大学）が行った。中村氏が、靖国神社にも庶民の宗教心を反映した「みたま祭」など、変化の契機となりうる要素があり、そこに仏教など他宗教が参画していくことによって靖国を開いていくことが重要だと主張した。李氏は、韓国人研究者として、近年の状況変化の速さを無視できないと指摘した。かつて散見されたように、表層的な謝罪の態度を見せるよりも、

文化的異同の説明をつくす過程で相互理解を進めるとともに、その冷静な営みのなかで本来に根深い問題を抉り出していくことが必要だと述べた。

その後、報告者とコメンテータとの議論、フロアーをも含めての質疑応答が活発に展開された。その中で、沖縄（平和の礎）を想起する必要性、怨親平等の理解、遺族が高齢化していくこれからの慰霊をどうするか、などが問題として提起された。また、賛成派は潜在的にもっと多いはずであり、その見解を知りたいという声も上がった。

最後に司会者**井上順孝氏**がシンポジウムを以下のように纏めた。政治的になげかけられた問題ではあるが、宗教者にとっては宗教と世俗という二分法によって片づけることのできない問題であり、それに関する発言は個々の宗教者の存在意義に関わる。死者への慰霊は「情」が最も発揮されるもので、国家がこれをどう処理するかは一国の宗教文化のレベルを示すものである。これをきっかけとして、追悼施設や靖国神社をめぐる様々な事柄がどういった問題を孕んでいるか、それぞれの立場で深めていくことができれば、今回のシンポジウムは意義があったと思う。